

蛍



柳瀬川ひろし

さっきまでアルミサッシの網戸越しに眺めていた庭の宵待草の黄色が、夕闇に溶け込んで輪郭を失い始めていた。

意を決して網戸を開けた私は、用意していた蚊取り線香を手に取り鼻先で香りを嗅いだ。ここ十数年というもの私は蚊取り線香とは縁のない暮らしをしてきた。

渦巻きを折らないように注意深く持つとマッチを擦り、炎の先端を線香の尖った部分に導いた。しかしなかなか火は付かず、やがて指先に熱さが走った。私は思わず僅かに残ったマッチの軸を庭先目がけて投げ捨てた。

それは夕闇の中、弧を描いて舞い、赤い軌跡をいつまでも残して消滅した。幸い線香には火が付いたようだった。私は簡易なアルミの台にその中心部の溝を差し込み、魔除けのお札でも置くかのように縁側の脇に配した。

「ホオウ、ホオウ、言うて呼んでみいや。ご先祖様が来ちよったらすぐ分かるき」

祖母の声が心の遠い奥底から聞こえてきた。

庭の木々の葉が微かに揺れている。この感じだ。近くの沢から飛び立った蛍がこの秘やかな風に誘われてもうすぐ庭先にやって来る。

私は唇を少し尖らせて「ホー、ホー」と声に出してみた。

けれど、目を凝らしてみてもまだ蛍の光を認めることはできなかった。

蛍が目に見えて減ってきたのは、私が高校生になった頃だったと思う。大学生の夏休みには全く見ることはできなくなっていた

残留農薬による健康被害が取り沙汰され、それを洗い流す機能のある浄水器などが家庭に浸透し始めた頃、蛍はまた田舎や自然保護を謳う都市近郊に蘇ってきた。私の生家の庭先にも昔のように蛍がやってくるようになったと知らされたのは、今から五年前の祖母の法事の時のことだった。

私は蛍を全く知らずに成人した者たちとは違い、それほどには感動しなかった。つまりは私が故郷を離れた時期と蛍が消滅した時期とが重なっていたため、「蛍がいなくなった」という事実や「蛍が年々減ってゆく」という危機感を意識することなく、都市生活者として身近に蛍のいない生活を享受してきたからなのだろう。

法事が終わった夜、久しぶりに親類たちと酒を汲み交わしながら庭先の蛍を見たとき、私は心のどこかに蛍に関わる大きな瑕疵を抱えていることに気付いた。

それは、いつの間にか遠い過去のこととして時効を迎えていたはずだった。法事の夜、蛍を見るまでは。

「ホウ、ホウ」

「ホオウ、ホオウ」

私は、祖母の歌っていたように蛍を呼んでみた。それは蛍を呼ぶというよりも、子どもの頃の記憶に残っている祖母を呼ぶことだった。

それはまた、遥か昔に亡くなった祖父や会ったこともないご先祖様たちを呼ぶことでもあった。

自分の声と記憶の中の祖母の声とが重なり溶け合いながら暗闇に吸い込まれていく。そのとき、右手の利休梅の枝先にぽっかり点った光が風に乗って緩やかに飛翔した。

「おばあちゃん！」

差し出した手は蛍に届くはずもなかったが、蛍は3メートルほど先を迂回すると、また利休梅の陰に吸い込まれるように消えていった。

「直子、せられんで。蛍さんは好きに飛ばしちょき。どうしても蛍さんに触りたかったら心の中で呼んでみい。あとはじいっと待ちよりや。おまさんの会いたいご先祖さんなら、ほっちよいても会いに来てくれるがで」

私が手を振り回して蛍を捕ろうとすると、必ず祖母はそう言って笑っていた。

祖母は縁側に座ってじっとしていたが、蛍は祖母に近付いては遠ざかり遠ざかっては近付いて、ときどきその引詰めた髪の毛のたばにふわっと触れるのだった。私はそのたびに「おじいちゃんが来ちゅうねえ」と祖母の袖口を引っ張るのだった。

利休梅の陰に再び青白い光の点滅を見た私は、法事の夜以来胸に秘めてきた問いを暗闇に向かって投げかけてみた。

「おばあちゃん、知っていましたか。私があの蛍買いのおじさんを川に流したことを」

蛍は一瞬光の色彩と点滅速度を変え、ふらふらっと私に近付いてきた。私は、じっとしたまま祖母を呼び続けた。

蛍は私の鼻先までやってきて点滅速度を遅らせた。腹端の発光

器は内部まで透けて見る事ができた。

「ちょっと休ませてや」

祖母が隣りに腰かけたような気がした。

私は静かに左手を差し出すと、かつて祖母がしていたように縁側の一部となって蛍を迎えた。蛍は左手の中指に柔らかな六本の足で触れしばらく羽ばたいていたが、ふっと羽根を畳み込むとその場に留まった。

12歳の初夏、六月頃のことだったと思う。下駄箱の隅で声を潜めて話している啓介たちの姿がなぜか気になって、通り過ぎたふりをして聞き耳を立てた。

「一匹五円やと。とられん言うてもあんなにいっぱい飛びゆうがで。みつかりやあせんちや。おれがおんちゃんを連れて行くき、今晚捕りに行こうや」

ひょうきんなことばかり言っている清が、いつになく真面目な調子で啓介と紀夫を誘っている。二人の声は切れ切れにしか聞こえないがどうやら清の説得に応じたようだった。

「ほんなら水門の脇の土橋に八時。塾が終わったらすぐおんちゃん連れて行くき」

清が動き出す気配を感じて私は足早に立ち去った。啓介が蛍を捕ることに同意したことが、なぜか心をいら立たせた。

私はその日学校にいる間、ずうっと蛍を捕らせないようにできないものか考えていた。そして、蛍買いのおじさんと三人を川に落として驚かせることを思い付いた。川に落ちて靴や服を濡らしたなら、きっと蛍狩りどころではなくなるだろうと。

三時半に学校が終わると私は大急ぎで家に帰った。祖母にはみっちゃんちで宿題をしてくると声をかけ、まっすぐ水門に向かった。

改めて見る田んぼは田植え後の稲が青々と目に眩しかった。3日前に降った大雨のせいで水門の手前は川が渦を巻いていた。大量に流れ込んでくる水は、その不要な分を水門の二十メートルほど上流で大川に排水する仕組みになっている。啓介たちの約束の場所は、その排水路に架かっている土橋だった。

排水路なので普段はそれほどの水量はないのだが、今日は違っていた。かなりの量で勢いよく流れていることが、水際のセリやオランダガラシが水没している様からもはっきりと見て取れた。

私は、土橋の上の少し広くなっている水際に啓介たちが必ずやってくると予想して蛍狩の足場になるであろう石に罌を仕掛けた。

夕食後、食器の片付けを済ませると、私はみっちゃんと蛍を見teくると母に伝えて家を出た。父はまだ帰って来ない。出がけに縁側の祖母に手を振った。祖母は微笑みながら手を振り返してくれた。私は辺りの人影に注意しながら急ぎ足で水門に向かった。薄暗くてよくは分からなかったが、誰もいるはずはなかった。いるとすれば蛍狩の子どもたちだ。幸いなことに今日は誰も来ていない。

水門に近付くにつれて蛍の光がちらほらと見え始めた。まだ蛍は草からは離れずじっと同じ場所で点滅を繰り返している。私は

ワクワクしながら水門を通り過ぎ目指す土橋に着いた。

風は出ていない。私の仕掛けた罟は蛍にさえ気付かれずその場所にあった。いつもはゆらりともしない石だが今日は違う。水際の草が水没したためだろうか、よく見るとここは他の場所よりも一段と蛍が多いようだ。

啓介があの石に足を掛けて蛍を追ったなら……。啓介なら川を泳ぐかもしれない。そして、水に濡れた髪の毛を掻き上げ、きっと皆で笑い合うだろう。蛍を捕らせたくなかったのは確かだが、私はこんな時間に啓介の顔を見ることが出来る嬉しさと心がいっぱいになっていた。そんな浮ついた気分のまま、私は土橋の橋桁の陰に身を潜めたのだった。

薄闇の中、目の前のイヌタデの葉が時折左右に揺れ始めたのが分かった。蛍を誘う風がどこからともなく立ち上がってきている。

「おんちゃん、こっちこっち」

清たちの声が聞こえてきた。私は注意深く伸びをすると四人の影法師を探した。啓介のことはすぐに分かった。初めて見るおんちゃんは片足を引き摺って三人の後ろを歩いていた。おんちゃんは足が悪かったのだ。

水門の上で立ち止まっていた四人は、思った通りこちらに向かってやって来た。

既に蛍の乱舞は始まっていた。私は蛍の光で見付かってしまうのではないかと冷や冷やしていた。が、不思議なことに今夜は一匹の蛍も私の近くにはやってこなかった。

「ほんならとろうか」

すぐ傍で清の声が聞こえた時だった。ドブンという大きな水音が響いた。

「おんちゃん、おんちゃん！」

蛍買いのおじさんと呼ぶ切迫した3人の声が蛍の点滅を一瞬にして掻き消した。

背を伸ばして四人の方を見ようとした時、私は目の前の急な流れの中をおんちゃんが静かに流れて行くのを見た。おんちゃんは頭と片手片足を水面に出し、私にご免なさいを言う間もなく闇の中に消えていった。

3人は慌ただしい足音とともに私の頭上の土橋に乗ったかと思うと、今度は下流の大川目掛けて一目散に駆け出した。私は恐ろしさのあまりその場を動くことができなかった。その足音はいつまでも私の耳奥に残った。

その夜、私は寝付かれずに闇の中を見つめて悶々としていた。明け方やっと微睡んだと思ったら、大きな川を人が流されていく夢を見た。流されているのは大人の男性だ。その傍らを三人の子どもが笑いながら泳いでいる。私は早くおじさんを助けてあげてと思うのだが、子どもたちは一向に平気だ。のんきに泳いでいる。切羽詰った私はもどかしさに締め付けられながら、ついに叫び声を発した。

夢は終わったが、不安はさらに大きくなっていた。

重い心を引き摺ってやっと学校にたどり着いた翌日、私はすぐに啓介たちを探した。

窓の外を見ると、案の定三人は集まってジャングルジムに登って

いた。

ここからでは声は聞こえない。しかし、三人は時々笑い合っているようだ。私は腹が立ってきた。しかし、そのことを三人に告げることにはできない。

私が石に細工してみんなが川に落ちるように仕組んだなどとは口が裂けても言えない。本当は正直に告白して謝らなければならない。そんなことは分かり切っているのだが、蛍買いのおじさんがどうなったのか分からない今、それを言うことはできない。

それよりも、そんなことを告白したなら啓介にどう思われるかが怖かった。

今朝の新聞は隅々まで目を通した。

「あんためずらしいねえ。見たい記事でもあったかえ」

母の声に飛び上がるほど驚いた。

見たくない記事を探していたのだ。

蛍買いのおじさんは海まで流れてゆき、今も行方不明なのだろうか。無事陸に上がって、足を滑らせ服を濡らしたことを面白可笑しく家族に話しているだろうか。

一通り新聞に目を通し、事件になっていないことを確認して私はやっと学校に行く気になったのだった。

その日は一日中3人の様子を窺っていた。悪い結果を想像しては息の詰まるような思いをしていたが、大事件が起きた気配は微塵も感じ取ることができなかった。

次の日もその次の日も新聞を見続けたが、ついにおじさんが溺れたという記事は見つからなかった。

啓介たちと距離を置くことで、不安は小さくなっていった。

あの日、心の襷に焼き付けられた疵はやがて忘れ去られたが、何かのきっかけをずっと待っていたのだ。私はもう一度その記憶を辿り、大人になった心であの日を再現しなくてはならなかった。そうでなければ、この重い荷物を背負ったまま人生を全うすることはできないとまで考えるようになっていた。

法事の夜、蛍がそのことをはっきりと思い出させてくれたのだ。

中指で休んでいた蛍は、ふっと羽根を広げると光を点滅させ私から離れた。それは、まるで私について来いとでも言うかのようにゆったりと庭先を漂った。

私は大急ぎでサンダルを履くと蛍の後を追った。

「直子、ついて来や」

祖母の声だった。

私は眼の前の蛍の光に誘われるように庭を回り込み、川に向かう道筋に出てきていた。

辺りはいつの間にか山頂から見る満天の星空のように蛍の光に埋め尽くされていた。

蛍狩りに興じた子どもの頃の記憶と今とが重なり体の芯に熱いものが込み上げてきた。

蛍は水門に向かう細い道を照らすかのようにゆっくりと飛翔した。

「おばあちゃん、どこへ行くが？」

楽しい気分で訊いた私に蛍が答えた。

「土橋が見えるところ」

私は無意識のうちに立ち止っていた。

蛍は急旋回すると私の鼻先に近付き、ゆっくり諭すように点滅した。

「ええもん見せちやる」

祖母の優しい声に背中を押されるようにして、私は土橋に向かって歩みを進めた。

水門が近付いて来ると懐かしさが込み上げてきた。耳慣れた川音が聴こえ、遠くでは子どもの話し声がしたように感じた。

子どもの話し声はやがて叫び声に変わり、こちらに向かって走ってくる気配がはっきり伝わってきた。

子どもらは男子3人。猛烈な勢いで大川に向かって走り去って行った。先頭の子には見覚えがあった。

蛍は彼らの後を追うように水門を過ぎ、大川を目指した。

私の膝はがくがくと震え、けれど、男の子たちの後を追って結末を確かめたい一心で、かろうじて前へ前へと歩を進めることができた。

大川に出るための目印となる榎の大木が、蛍の絨毯とは対照的に闇夜に黒々と聳えていた。

私はその威圧に押し戻されそうになりながらも、見届けなくてはならないという大きな力に突き動かされて進んでいた。

「直子、覚えちゅうかえ。オオムラサキの幼虫を探したときのこと。枝先に黄緑色のきれいなヘビがおって、あんた、ギヤーっ言うて落ちてきたがやったねえ」

「おばあちゃんは何でもよう覚えちゅうねえ」

そんなこともあったと心を和ませたとき、大川の暗い流れが目
に飛び込んできた。

私は川岸に大きな影法師と小さな影法師3つが踊るように揺れ
ているのを見た。

「おばあちゃん、おじさん溺れてなかったんやねえ。よかった」

おばあちゃんは、いい子いい子をするかのように私の頭に柔ら
かく触れた。私は体の芯から湧き上がって来る安堵感に包まれて
いた。

「おばあちゃん、ありがとう」

溢れ出す涙が足下に黒い滲みを作り出し私を取り囲んでいく
。

気が付くと私は縁側で泣いていた。

片山啓介は、日本海に面した棚田を見下ろしながら陸風が吹き
始めるのを待っていた。啓介はこの風が棚田の上にある小さな沢
に生息する蛍を呼ぶのだと考えていた。

稲を刈り取った後の棚田は水が抜かれ次の年の春まで水が張ら
れることはない。蛍が田で生きてゆくのは難しい。

一方沢の水は年間を通じて枯れることはないので生きられる。

今年もそろそろホタルの飛ぶ時季になっていた。海を見下ろす
丘上の道から見る棚田には今年も青々と稲が育っていた。それは
海風や陸風に晒されながら大地にしっかりと根を張り、日本海の
暗緑色と対をなす色彩としてこの地の風景に溶け込んでいた。

いやそうではなく綿々と続く先人たちの営みが、この地を代表する景色を創り出してきたのだ。

眼の前の稲が小さな波を作り始めた。背後から啓介を包み込むような涼風が微かに吹き降りてきた。

左手にふわふわした光の点滅を見た。風が彼の前で巻いているのだろうか。蛍はふらふらっと眼の前にやって来た。

手を静かに差し出すと、蛍は一瞬の躊躇いを見せた後、中指の腹に羽を休めた。

啓介はそれを両手でそっと包み込むと、子どもの頃よくしていたように手籠にして覗いてみた。蛍の柔らかな6本の足の感触をじっと確かめていると、不意に少年の頃蛍買いのおじさんが町にやって来たときのこと蘇ってきた。

あの頃田舎ではまだ蛍は夜道を照らすほどに飛んでいた。蛍狩りは子どもたちの初夏の宵のお楽しみだった。しかし、都市部ではすでに蛍が姿を消し始めていたのだ。そんなことにも気付かず蛍を売ろうとした。蛍で小遣いを稼ごうとしたのだ。

結局あの目論見は失敗に終わった。

少しずつ鮮明になって来た記憶の中におじさんが足を滑らせて川に落ちたときの水音が聞こえてきた。薄闇の中、手を差し出したがおじさんはあっという間もなく流された。

いつもはひょうきんな清があれほど真剣になったのを初めて見た。

3人で堤防を走っているときは生きた心地がしなかった。けれど大川に出て用水路との合流点付近に目をやると黒い影が足を引き摺って歩いているのが分かった。啓介たちはほっとしておじさんの元へ急いだ。

おじさんは泳いだのは軍隊の時以来だと笑っていた。その時初めておじさんの脚が悪いのは戦争で負傷したためだと聞かされた。おじさんは海軍で船に乗っていたという。潜水艦の魚雷攻撃を受け沖縄の海で沈没。おじさんは爆発の際の破片で大怪我を負った足をかばいながら泳ぎ続け数少ない生存者の一人となったらしい。

おじさんは濡れた服のまま川原で啓介たちに言った。本当は蛍を買ったり売ったりはしたくなかったのだと。そして、おじさんは教えてくれた。この蛍もあと何年かでいなくなるぞ。だから大事にきなさいと。

啓介たちは信じなかった。今いる生き物がいなくなるという経験がない者にとって、蛍は永遠だった。勿論オオクワガタもヒラタクワガタも同じだった。いなくなるなどとは誰も考えていなかった。

おじさんは濡れたズボンのポケットに手を突っ込んでもぞもぞ動かしていた。やがて10円玉を3枚取り出すと駄賃だと言って啓介たちにくれた。そして、蛍買いはやめて明日東京に帰ると言った。

中学生になると啓介たちは蛍狩りはおろか、蛍を見ることすらしなくなっていた。興味の主体が音楽や映画、読書、スポーツと

広がっていった。

そんな毎日の繰り返しは、自然の変化に気付くだけのゆとりすら生み出さなかった。結局、身の回りの自然の変化に無関心なまま東京に出てしまったのだ。

そんなことを思い出していると、ふいに直子のことが頭を過ぎった。

直子は蛍が好きだった。よく蛍狩りにも行った。

直子は虫籠いっぱいには蛍を詰め込むと、それを懐中電灯の代わりにして歩いた。啓介がそんなに捕ってどうするのかと尋ねると、蚊帳の中で放すのだと嬉しそうに答えた。蚊帳の中に寝そべってまわりを見渡すとまるで宇宙を旅してるみたいだよと。そうやって楽しんだ後、蚊帳を開けて蛍を庭に飛ばすと私は地球に帰還する人工衛星の乗組員の気分になるのだと。

直子とは仲が良かったはずなの、なぜか小6のあの夏あたりから口をきくことが少なくなった。

清は地元で建築関係の仕事をしている会社の社長だ。子供も4人いるという。

紀夫は東京でしばらく公務員をした後、結婚して地元に戻り家業の酒屋に精を出している。

直子はどうしているのだろう。東京の大学に進んだという話は耳にした。けれど東京という街は一時疎遠になった男女を再び出会わせるにはあまりにも巨大過ぎた。例え二人が互いに惹かれ合っていたとしても偶然は起こりえなかっただろう。

手の中の蛍がもそもそと動いた。

手籠の隙間を大きくして風を入れた。蛍は飛び立つ仕草を見せ

たが思い留まったように翅を閉じた。

大学3年の夏、啓介は由子とともにこの場所に立っていた。

由子とは成人式の日に結婚を約束し合っていた。大学の1年先輩で同じサークルに属していた。

初めて見る日本海は太平洋とは何かが異なっていた。まず思ったのは色彩だ。香りの希薄さも気になった。波も静かだった。けれどそういう印象を抱かせた一番の理由は、ここから見る景色だった。

故郷の海をこのような海岸線から見たなら、目に入るのは緑の低木だ。枇杷や蜜柑などの柑橘類ということも珍しくない。が、田を見ることはない。啓介の知る限り棚田は山間部にある。急峻で険しい山肌がそのまま海に没してゆくような景色を見慣れている啓介には、海を見下ろす棚田という景色が、違和感を抱かせつつ、たまらない魅力も感じさせた。

由子にそのような話をすると思議そうに海を見ていた。由子は由子で大学生になるまで太平洋を見たことがなかったという。そして、「でも蛍はきれいだったわよ」と言った。この頃は見えなくなったと彼女の母親が残念がっていたことも聞かされた。

この半島で暮らす彼女の母親は蛍の飛翔を見ることを夏の楽しみの一つとしながら彼女を育ててきたらしい。彼女が語る数少ない母親のエピソードは啓介の心を落ち着かせるものばかりだった。

由子は母に会ってほしいと頼むわけでもなく啓介をこの地に導いた。そして先に卒業して啓介が来るのを待っていると言った。今から思えばちょっとした勇気が必要だったことだろう。

しかし、1年間の遠距離恋愛のことではなく、由子が大きな旅館の跡取り娘だと聞かされていたなら、おそらく啓介はその状況から逃げ出していたことだろう。

由子は賢明なことに旅館の話は一言も口にしなかったのだ。二人の結婚が決まるまでは。

啓介は地元の市役所に採用となり現在は観光課に勤めている。

風が辺り一面を優しく撫で始めた。

そろそろだなと後方を見上げるとそこかしこで光の点滅が始まった。眼下に視線を戻し棚田の畔をゆっくりなぞってゆくと飛び立つ前の光の点滅を見付けることができた。

潮風を受けてこの地に生きることは蛍にとってどんな意味があるのだろうか。それは若い頃の啓介にとっても同じ疑問だった。けれど今は知っている。生きることに意味がついてくるのだと。

目が慣れてくると、畦を浮かび上がらせるかのように蛍が点滅を始めたのが分かった。それは薄明りの中にうねる日本海を背にして、千枚田と呼ばれる棚田の輪郭が立ち上がって来る幻想的な瞬間となって啓介を呑み込んだ。

啓介はこれだと思った。

棚田の畔をライトアップすれば、収穫を終えた棚田にもたくさんの観光客を呼ぶことができる。

手籠の中の蛍の動きが激しくなってきた。

静かに籠を開くと蛍はふっと飛び立ち啓介の目の前を旋回した

。何度も何度も旋回した。それは子どもの頃先生にもらった「はなまる」を連想させた。